

## 〈資料〉

### 『竹島経営者中井養三郎氏立志伝』明治三十九年（一九〇六）年

奥原碧雲

（表紙）

「竹島経営者」 中井養三郎氏立志伝

明治三十九年

奥原碧雲

（本文）

「成功寄稿」

竹島経営者 中井養三郎氏立志伝

奥原碧雲

三百年來鎖国の余習深く膏盲こうこくに入りて、武陵桃源の宿夢  
なほ未だ全く醒めず、蒼海の遺利は、空しく外人の蹂躪  
に委して顧みず、僅に沿海数里の海上を舞台として、み  
たりに神仏の加護をたのみ、罟網を張りて魚族の来集を  
万一に僥倖するが如き、実に海国男児の恥辱にあらずや、  
この時にあたり、狂瀾怒濤を叱咤して、魚族の根拠地に侵  
□□□□万里の異域に遠征を企て、或は海底千仞の深潭  
□□□□探らんとす、未だ成功の域に達する能はずとい  
へとも聊か戦捷進取の国民として意を強うするに足る、  
山陰の快男児中井養三郎氏の如きその一人といふべし。  
氏は元治元年正月二十八日伯耆国東伯郡（旧久米郡）小  
鴨村大字中河原に生る、父を甚六（今は亡し）といひ、母を  
ウラ（同郡安田村河本久次郎の姉）といふ、氏はその次男  
にして、長兄を喜七郎といひ、家業を継続して醸造業に従事

せり。

養三郎氏は、明治十一年下田中小学校を卒業してより、松  
江に遊学し、碩儒内村友輔翁の門に入りて、漢学を修むる  
こと多年、明治十八年終に笈を負うて東都に遊び、斯文龔  
に入ることとなりぬ、久しく山陰僻輒の地に生長し  
て、社会の風潮に遠かりし青年が、一たび活動の中心たる  
東都に入るや、見るもの聞くもの皆刺撃の衝点たらざる  
はなく、果然、氏が思想界に一大激変を生ずるに至りぬ、多年心  
血を注ぎて学習せし漢学は、因循固陋にして、今後の活社  
会に立ちて、大飛躍を試むるには、あまりに迂遠に、あま  
り姑息なりとし、苟くも学を以て世に立つ、須らく英  
学を研究せざるべからず、しかし、齢大におくれたり、今よ  
□□□□めて英学を修むるは、可惜有為の時期を空しうす  
□□□□男子学を修むる畢竟事を成さんかためのみ、修  
学のため成業の機会を逸するは愚の極なりと、梓弓ひきて  
帰らぬ青年の血氣、羈絆をはなれし悍馬の如く、翌十九年  
（二十三歳の時）断然学を廃して、「人間到处有青山、埋骨  
何限故郷地」と放吟して、海外万里の波上に遺利を探らん  
と決心するに至りぬ、事頗る無謀の挙に似たりといへども、ま  
た以て、氏が特性を発現せるものといはざるべからず。  
爾來、種々の冒險的探検事業を企図し、或は小笠原島に利  
源を探り、或は渡米を企てたりしが、遂に明治二十年かの  
筑波艦に便乗して南洋探検をなしたる志賀重昂氏と濠  
州視察を企図し、父兄の同意を得て、数千円の旅費を獲、渡航  
の準備中、長崎にて笠千里なる悪漢の手にかかり  
て、旅費全部を巻き上げられ、進退ここに窮き  
りて、空しく長崎の近傍松島に籠居中、露領浦汐斯徳に海

鼠の蓄殖豊富なるを採知して、これが潜水器採取を企画し、明治二十一年実弟嘉造氏と計り、調査費運動費に鉅額の資金を投じて、漸くにして創業の運びに到れり。

かくて、長崎の潜水器業者が浦汐斯徳の海鼠採取の非常に有望なることを採知するや、明治二十三年頃より、激烈なる

□□□□し、中井氏は僅に杉浦商店（浦港第一の日本商店）の後援を

□□□□るのみにて、二橋（謙）貿易事務官以下在留日本人の多数を敵として奮闘し、常に優勝の地位を占めしが、結局

二橋事務官の取扱にて、抽籤を行ふこととなり、その結果

また全勝を占むるに至りしも、二橋氏が間もなく、抽籤の効力を無効に帰せしめし結果、氏の事業は一大打撃を被り、弟嘉造氏の

相続せる亡叔父の遺産全部を喪失するの不幸に陥りた

り、既にして、露国地方庁は、海鼠採取の有利なること、及び

潜水器漁業の有害なることを知り、間もなく、日本人の海鼠

採取、潜水器漁業を厳禁することとなり、双方の計画はために画餅に帰したり。

明治二十五年、氏は浦汐斯徳蹉跌の残物を収めて、朝鮮全

羅忠清地方の沿海を採検し、潜水器を携へて彷徨せしも、格別得

る処なかりき。

勇敢取の気象に富みたる海国の快男児中井氏は、蹉跌

に蹉跌を重ね、失敗に失敗を重ねて、今や而立の齡に至り、

未だ成業の緒をだに見出すこと能はずして、空しく故郷

に帰るの已むを得ざるに至りしは明治二十六年にして氏の胸中実に察するに余

ありしなり、かくて、帰郷後は、郷里沿海の海底を調査し、必

ず海鼠の棲息することを確信し、知己親友の

□□□□を熱心なる忠告を排して、断然九州地方より、漁夫を

□□入れ試験の結果好成绩を得て、いよいよ資金を投じて、明治二十七八年より三十年頃にかけて伯州御来屋を本拠として隠岐、石見の沿海に及ぼし海鼠採

取潜水器漁業を営み、数多の潜水夫を役使して、盛に事業を拡張し、当時の長崎商報をして、伯州産海參なる名目の下に相場を掲載せしむるに至れり。

明治三十一年島根県並に隠岐島庁より補助金を得て、

巾着網試験事業を引きうけ、ある事情よりして、一時潜水器漁業を中止して、小山正光、谷尾範吾等の諸先輩の賛助を

得て、北冥社を組織し、盛に漁業を営まんとせしが、

種々なる紛擾のため、遂に成功を見るに

至らずして、氏は社員を排斥をうけ、結局潜水器漁業に依りて得たる多少の蓄積を盡し、剩へ、世間の信用を失

し、爾来蹉跌に蹉跌を重ねて、幾多の負債を生じ、大に

困難の状態に陥るに至れり。

一難を排し、一艱を経る毎に、志いよいよ堅く、勇往邁進海上の遺利に注目せる氏は、再三再四の挫折に遭ひて、なほ

志を屈せず、居を隠岐国西郷に移し、（現在居住地）千辛万

苦新事業の企図に奔走中、潜水器漁業者よりリヤンコ島に

海驢あじかの群集せるを聞き、氏が鬱勃た海国的企図は、再び海驢

漁業に向つて傾注せらるるに至れり。

リヤンコ島とは、リアンコール島の転訛にして、二百五十年

以前より隠岐の漁人に発見せられ、爾来松島の名を以て沿海

地方の人に知られしが、海軍水路部の調査によりて、鬱陵

島一名松島とせられし以来、リアンコール岩と称せられたる絶海の岩

島なり、北緯三十七度九分三十秒、東経百三十一度五十五分〇秒に

位し、隠岐島の西北八十五湮、鬱陵島の東南五十五湮、日本

海の中心にある岩嶼にして、東西の二岩嶼及び幾十の小礁より成り、西嶼は海拔三百八十一尺周囲十五町許、東嶼は海拔二百二十六尺周囲拾町余、全島火成岩より成り、半□以上は僅かに軽土を被り、雑草の生ずるのみにて、一の樹木を生せず、沿岸は断崖絶壁にして、両嶼相對する処、東嶼に狭小なる砂礫地ありて、仮住の猟小屋を建築するを得るのみ、全嶼飲料水なく、作物なく、古来無人の岩嶼なりしか、明治三十八年二月竹島と命名して島根県の領土に編入せられ、全年五月二十八日、日本海海戦に際し、東郷提督の公報によりて、竹島の名は全世界に喧伝せらるるに至れり。

敗軍の將兵を談ぜざること数年、滿腔の企業熱は鬱勃として禁ずる能はず、正に明治三十六年氏は再びリアンコ島海驢捕獲業を企図せり、然るに、友人知己皆これを不可とし、ことに真野哲太郎氏の如き、大にその不可を鳴らし、隱岐国島前より、先はこの業に従事せんとして失敗せし歴史をひきて、熱心に忠告する処ありしも、氏の決心は牢乎として動かすべからず、明治三十六年五月意氣相投合せる小原、島谷権蔵の両氏をリアンコ島に渡航せしめたり、両氏は岨強の健児八名とともに、中八尺長四間の漁舟に搭じ、北海の洪波を蹴破りて、同島に着し、はじめて日章旗を岩頭に翻し、島谷氏は有望なる報告を齎らして、一先帰航せり。されど、銃器火薬その他猟具の準備不完全なりしたため、同年は十分の成功を見ずして帰国

し、翌年の漁期を待ちて、一大雄飛を試みると計画せり、実にリアンコ島は、日本海中における海驢の群集地にして、毎年五月頃より七八月頃に至るの間、幾千万の海驢分婉交尾のため、同島に群集し、岩頭全く海驢群を以ておほはる

るの壯觀を呈せり。

氏は、心ひそかに翌年の成功を期しつつ、秘密に準備に着手せしが、股肱の健児小原氏は予備召集に依じて出征の途に上り、島谷氏は病魔に斃れ、事業上大に頓挫を生ぜしも、氏は屈することなく自ら幾多の漁夫を率いて渡島せり、しかるに、企業の有望なるを探知するや、石橋松太郎、井口龍太、加藤重蔵諸氏の有力なる競争者あらはれ、競争濫獲の弊を生じ、海驢漁業は数年ならずして絶滅せんことを憂ひ、海驢漁業の必要を感じ、加ふるに、海図によれば、全島は朝鮮の叛<sup>反</sup>図に属するを以て、一旦外人の来襲に遭ふも、これが保護をうくるの道なきを以て、かかる事業に向つて資本を投するの頗る危険なるを察し、同島貸下を朝鮮政府に請願して、一手に漁獵權を占有せんと決心し、全年の漁期終るや、一權<sup>權</sup>万金の夢を懐にして上京の途に上れり。氏はまづ隱岐出身なる農商務省水産局長藤田勘太郎氏に図り、牧水産局長に面会して陳述する処ありき、全氏もこの挙を賛成し、先づ海軍水路部につきて、リアンコ島の所屬を確かめしむ、氏は即ち肝付水路部長に面会して、教を請ふや、同島の所屬は確乎たる徴証なく、ことに日韓兩國よりの距離を測定すれば、日本の方十哩の近距離にあり（出雲国多古鼻より百〇八哩、朝鮮国リッドネル岬より百十八哩）加ふるに、朝鮮人にして従来同島経営に関する形迹なきに反し、本邦人にして既に同島経営に従事せるものある以上は、当然日本領土に編入すべきものなりとの説を聞き、勇躍奮起、遂に意を決して、リアンコ島領土編入並に貸下願を内務外務農商務三大臣に提出するに至れり。かくて、内務省地方局に出頭して、陳述する処ありしも、

同局に於ては、目下日露兩國開戦中なれば、外交上領土編入はその時機にあらず、願書は地方庁に却下すべき旨を通ぜらる、氏はやむを得ず、再びこれを牧水産局長にはかる処ありしも、外交上の事とあれば如何ともすること能はずとの言に、失望落胆、空しく不遇をかこつのみなりき、時恰も地方官會議に列席のため、井原島根県知事は農商主任たる県属藤田幸年氏を随ひて上京中なりしかば、氏の活路をここに求めて、藤田氏を旅館に訪ひてこれを図る、全氏も大に賛成して地方局に向つて具申すべきことを約せらる、然るに地方局の意見前述の如く、藤田氏も到底成功の見込なきを以て、帰国して時機をまつの外なき旨を以てせり。

今や将来有望の事業を目前に控へて、所属不明のためにみすみす経営の時期を失し、剩へ濫獲数年に亘らば同業の前途頗る寒心すべきをおもへば、氏の胸中実には察するに余ありしなり、されど男児一たび志を決す、百難を排除するの決心なかるべからずと、同郷出身の桑田熊蔵氏（現今貴族院多額納税議員たり）にこれを図る、桑田博士即ち書を裁して、氏を山座政務局長に紹介す、氏は山座局長に面会して、リヤンコ島経営につきて意見を陳述し、熱誠面に溢れ、しかし毅然として決する処あるが如し。局長はおもむろに聴き終りて、外交上のごとは他者の関知する処にあらず、眇たる岩島編入の如き

些々たる小事件のみ、地勢上より見るも歴史上より見るも、はたまた時局上より見るも今日領土編入は大に利益あるを認むる旨を漏されたり。

ここに於て、桑田氏と同行して内務省にいたり、井上書記官に面会して、事情を陳述し、遂に同省の同意を得て閣議に

上り、明治三十八年二月二十二日島根県告示第四〇号を以て同県の領土に編入し、竹島と命名せられたり。

中井氏は、一旦帰国して徐々に計画する処ありしが、いよ領土編入の件発表せられ漁獵地貸下につきて島根の所管となりしかば、競争者続出し、前記数名の外、幾多の出願者を生じ、同県庁に於てもその採択に困しみ、しかば、中井氏は、橋岡友次郎、井口龍太、加藤重蔵三氏と協同して竹島漁獵合資会社を組織し、全島海驢漁獵を出願し、同年六月五日、松永島根県知事より許可を得て、同島の海驢漁獵権は中井氏外三氏の占有に帰し、幼児を保護し、捕獲頭数を制限して将来の計画を立て、海上における多年の経験と、海驢捕獲に関する数年来の実験とによりて、本年より同島経営に向つて全力を傾注せんとしつつあり、また海国の偉丈夫といふべきなり。

余、今春竹島視察一行に加はり、一夕中井氏と会談し、苦心慘憺たる氏の経歴談をききて、感興を禁ずる能はず、隠岐丸甲板上手を握りて、その成功を祈りたる時を想見し、帰来先筆を呵して本篇を草しぬ。

明治三十九年五月二十日